

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月26日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21510272

研究課題名（和文） 現代日本の都市表現文化におけるディアスポラと社会的排除の研究

研究課題名（英文） “Diaspora” and Social Exclusion in Expressive Cultures in Contemporary Japan

研究代表者

浜 邦彦（HAMA KUNIHICO）

早稲田大学・教育・総合科学学術院・准教授 研究者番号：60388634

研究成果の概要（和文）：2000年代後半の日本の都市における、公共空間からの排除に抵抗するアーティストの活動を記録し、アートや表現と公共性をめぐる諸問題を議論した。また、2011年以降の脱原発デモをはじめとするアクティビズムの映像記録を収集し、制作者との対話を通じて、公共的な表現とそのアーカイブ化の方法をめぐる諸問題を検討した。いずれの場合にも、大学の内外を問わず、アーティスト、アクティヴィスト、研究者らが横断的かつ開放的に議論できるネットワーク的な場を構築した。

研究成果の概要（英文）：This study describes the changes of urban expressive culture in Japan in the late 2000s decade. We examined the artists' movement against social exclusion from the public spaces, and discussed the relations between the artistic expression and the public sphere. We also archived films and videos of the activism after Fukushima nuclear disaster. In any case, we tried to organize some networks in which artists, activists, and researchers can discuss interactively and openly, both inside and outside the university.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
総計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：複合新領域

科研費の分科・細目：地域研究

キーワード：地域間比較研究，カルチュラル・スタディーズ，ディアスポラ，社会的排除，公共性

## 1. 研究開始当初の背景

## (1) 都市表現文化と&lt;ディアスポラ&gt;

表象文化論，都市研究，文化社会学，ポピュラー音楽研究といった現代の都市表現文化を扱う諸分野において，<ディアスポラ>というキーワードで表わされる側面への注目

がはじまったのは，ようやく最近のことにはすぎない。現代日本の文化研究における<ディアスポラ>の次元への分析的視角は，比較文学や移民研究といった，あらかじめ多文化間の枠組みをもつ分野にかざられていたように思われる。

本研究の当初の想定では，グローバルな

ディアスポラのモチーフが、ストリートの表現文化を特徴づけるものとして——たとえばレゲエやHIPHOPのサウンド、映像における記憶の語り(routesの語り)、越境的・横断的な表現のミクスチャーなどを通じて——現れているのではないかと考えられていた。実際、2000年代における、グローバル化するストリートの表現文化の多様化——それは多文化主義的な文脈において起こっていると思われる——には、こうした志向が明らかにみとれる。というよりもむしろ、文化的表現において多様性を重視する表現者たちが、ディアスポラの背景をもつ文化的表現への感受性を高め、それらを積極的に取り込んできたというべきか。

それらを分節し、理論化する試みは、ともすればアカデミックな批評言語と「現場」の文化実践の間にハイアラーキーをうち立ててしまい、ポピュラーな文化実践の中の批評的な先端部分だけを拡大して、批評言語によってこれを正当化し擁護する、といった傾向に陥りかねない。しかし<ディアスポラ>の文化実践において重要な諸側面は、そうしたハイアラーキーによってはむしろ抑圧されてしまうような日常性のなかにこそひそんでいる。そうした日常性が——たとえば排除の圧力によって——危機にさらされるときに、<ディアスポラ>の意識はむしろ際立つものであると考えられる。

## (2) 社会的排除と表現文化

貧困・格差問題への注目は近年急速に高まっており、とりわけ若者の「プレカリアート」化の状況は、インターネットや『ロスジェネ』のような当事者世代の論壇的な活動によって多くの議論を呼んできた。そうしたことを背景に、都市におけるサウンドデモなどの異議申し立ての表現活動も大きく可視化されてきた。

野宿者排除に対する抗議運動といった、従来であればごくマージナルな「左翼的」運動とみなされていたものの中にも、プレカリアートの運動がオーバーラップするようになり、「左翼的」スタイルにとどまらない斬新な表現活動が見られるようになってきた。とりわけ目を惹くのが、野宿者排除への問題関心から活動をはじめた「246表現者会議」のような若いアーティストたちの実践である。かれらはアーティスト的な表現活動それ自体が社会的に無力化されている状況と、新自由主義的な「ジェントリフィケーション」によって公共空間から排除されていくものを重ねて捉え、そこから社会的排除に対抗する新たな公共的表現を模索していた。

このように、グローバルな文化の<ディアスポラ>状況と、ローカルな場所をめぐる<社会的排除>とを立体的に重ねてみると、現

代日本の都市において頻発するプレカリアートのデモや新奇な異議申し立ての表現は、どのような変化を示唆しているのだろうか。

## 2. 研究の目的

本研究は、日本の都市の路上(ストリート)をフィールドに、グローバルなディアスポラのモチーフが、ストリートの表現文化にどのように受容され、その表現文化をどのように変容させているかを探ると同時に、それらのディアスポラ的・周縁的なモチーフがつねにさらされている社会的排除の圧力や緊張が、この表現文化にどのような性格を与えているかを、主にフィールドワークとインタビューによって、具体的かつ実践的に調査し考察するものである。

本研究が取り上げる表現文化とは、音楽、グラフィティ(壁画やダンボール絵画を含む)、写真・映像表現、身体的パフォーマンス、デモ、アーティスト・イン・レジデンス、インターネットや自由ラジオ放送といった、幅広い領域の緩やかな重なり合いの中で行われる、多様な実践の結びつきによって成り立つもののことである。これらを個別化することなく分析対象とするためには、外部的な研究主体による個々の作品批評や理論的分析といった態度は、いったん捨てなければならない。研究者もまた、同時代の都市を生きる表現者・実践者たちと多元的に関わり合い、その関わり合いがもたらす変容を自ら経験しつつ、理論化し続ける努力を自らに課さなければならないだろう。そうした研究対象との生きた実践的な関わり合いの中からはか生まれ得ない、文化生成の活力を生き生きと捉える記述・分析・理論構築が、本研究の独創性となるべきものである。

## 3. 研究の方法

主な観察の対象となったのは、東京都渋谷区立宮下公園の改修計画(「ナイキ公園化」計画)に対するアーティストたちの抵抗運動(2009年~2010年度)と、高円寺「素人の乱」を中心とした反原発デモ(2011年度)である。

これらはリアルタイムで移行している実践であり運動であるため、偶発的かつ予測不能で、根本的にいえば、事後的にしか把握できない性質のものである。そうした中で生起している変化をとらえるために、本研究では研究のための組織そのものを「研究対象」である文化実践のスタイルに近づけることとした。

すなわち、研究遂行の母体である「ストリ

ート研究会」(代表: 浜邦彦)を中心に、活発な人的交流と意見交換を通じて、アクチュアルで領域横断的なネットワークを築いてきた。とりわけ小川てつオ氏、いちむらみさこ氏、武盾一郎氏といったアーティストたち、山川宗則、藤井光、OurPlanet-TVといった映像作家・制作者たちとは継続的な協力関係を結び、また須納瀬淳、星埜恵、諫山三武ら現場をよく知る若手研究者たちからの実践的な協力を得た。また渋谷区宮下公園の「ナイキ公園化」計画に関しては、渥美昌純氏から専門的知識の提供を受けた。

2011年3月の東日本大震災につづく福島第一原発事故は、都市の路上における異議申し立ての表現活動を一挙に全般化することとなった。とくにインターネット上のYouTubeやUstreamを通じてほぼリアルタイムに配信される映像や、ツイッターのようなソーシャル・ネットワークが果たした役割の大きさは疑いを入れない。ここから本研究は、アクティビズムに映像が果たす役割と、その表現方法やメディアへの関心を深めることとなった。反原発デモの現場におけるフィールドワークとともに、映像制作者との対話を深め、アクティビズムをめぐる映像アーカイブのあり方を検討し模索することとなった。

#### 4. 研究成果

##### (1) 概要

先述したように、本研究の当初の想定では、グローバルなディアスポラのモチーフが、2000年代のストリートの表現文化を特徴づけるものとなっているのではないかと考えられていた。本研究の課題は、それらを分節し、理論化することであった。実際、多文化主義的な文脈において、多様性を重視する意識的な表現者たちにとっては、ディアスポラ的な表現スタイル、すなわち移動・越境・混雑の側面を強調し、あるいは剥奪や流浪、贖罪や帰郷をモチーフとする表現は、ますます多く採用されてきた。

しかしながら、本研究が注目してきた、宮下公園をはじめとする公共空間の排除に抵抗するアートの実践、2011年の脱原発デモなどの表現において、そうした<ディアスポラ>的スタイルへの志向を見てとることは難しかった。むしろ海外の運動とも共鳴する新たな抵抗のスタイルのキーワードは“Occupy”であり、場所や空間をめぐる意識は——排除への感受性をいわば前提としながら——異なった位相にあることが見てとれた。

他方、2011年3月の福島第一原発事故は故郷を離れざるを得ない多くの避難者を生み、大規模なディアスポラの発生を予想させ

た。実際、早尾貴紀が『津波のあとの第一講』(2012年)所収論文で指摘するように、こうした予想のもとにいち早く避難者のネットワークを構想できたのは、ディアスポラ研究に携わる研究者たちであった。しかしそうした動きは、その後の大衆的な脱原発運動の広がりとはそのまま重なるものではなかった。ツイッターをはじめとするソーシャルメディアが生み出すTAZ(Temporary Autonomous Zone)的・クラウド的なデモの祝祭的・開放的な空間に比べて、故郷を離れて避難生活を強いられている人々が生きる<ディアスポラ>的生活の実態はしばしば不可視化されており、両者を実質的に結びつける感情的・感性的な基盤がどのようなものであるのかは、さらに慎重な分析を必要とする課題として残されている。

代わって、本研究を遂行していくうちに重要性を増してきたのは、むしろ<社会的排除>と結びついた、<公共性>をめぐる問いであった。

##### (2) アートと公共性

2009年度は、東京都渋谷区宮下公園の「ナイキパーク」化計画の問題を中心に、日本の都市空間における「公共性」をめぐる対立に関心を絞って、宮下公園で活動するアーティストや表現者へのインタビューやフィールドワークを行った。「大学」と「路上」を結ぶ知の協働を生みだすべく、研究者、アーティスト、活動家らの連携からなる領域横断的な研究会「ストリート研究会」を組織し、研究体制の構築をはかるとともに、早稲田大学メディアシテイズンシップ研究所、246表現者会議、みんなの宮下公園をナイキ公園化計画から守る会との協力関係のもと、早稲田大学と宮下公園(雨天により会場変更)の双方で、公開シンポジウム「アートと公共性」を開催した。

2010年度は、東京都渋谷区立宮下公園のナイキ・ジャパン社による改修工事に反対するアーティストらの運動をとりあげ、公共空間の意味、メディアのあり方を含めた、公共性をめぐる議論を深める一年になった。主な活動は、以下の通りである。

- ① みんなの宮下公園をナイキ公園化計画から守る会」「宮下公園アーティスト・イン・レジデンス」をはじめとする、宮下公園での多様で創造的な活動への継続的な参与と調査。
- ② 7月に駒澤大学で開催された「カルチュラル・タイフーン2010」への全面的な協力および、展示ブース出展。
- ③ 2010年11月20日および27日に早稲田大学で、公共性をめぐる連続シンポジウムを開催し、菅豊氏、平林祐子氏、植松青児氏、渥美昌純氏ほかから「コモンズ」をめぐる問題提起を受けた。

- ④ 紙媒体、映像を含む宮下公園の活動のアーカイブ化の着手。

### (3) 映像とアクティヴィズム

渋谷区宮下公園の「ナイキ化」に反対するアーティストの運動は、宮下公園改修工事の終了によってひとつのサイクルを終えた。2011年度の本研究は、東日本大震災および福島原発事故以降、日本の各地で盛んに行われるようになった脱原発デモや、また海外の「オキュパイ」運動などとも呼応しながら新たな表現形態を発展させてきた都市のアクティヴィズムに注目し、前年度までに引き続いてストリート研究会を研究活動の場として、主に首都圏の脱原発運動にかかわる映像記録や映像作品の制作に携わっている作家やアーティストの協力を得た。

2011年3月～4月、原発事故へのリアクションとしてもっとも早い時期に組織されたデモが、渋谷区宮下公園の「ナイキ化」に反対する活動と、高円寺「素人の乱」のネットワークによるものであったことは意義深い。その後も下北沢、杉並、国立といった、それぞれのローカルティをもった創発的な表現文化が世代を超えて浸透し、主にインターネットを介して共有され、触発し合ってきた。この「クラウド化するデモ」の政治学的な意義については、五野井郁夫『「デモ」とは何か——変貌する直接民主主義』（2012）が理論化した。

ストリート研究会では、この間のフィールドワークを通じてアーティスト、活動家、ジャーナリスト、研究者らから多くの資料や映像記録の提供を受けており、これらの整理とアーカイブ化についての議論を重ねてきた。

2012年3月8日には、映像アーカイブをめぐるシンポジウムを行い、毛利嘉孝、上岡誠二、山川宗則、白石草、浜邦彦、安田幸弘、藤井光、花崎草、中村友紀、甲斐賢治、清水チナツの各氏が参加して、Ustream上で公開放送を行った。研究成果のまとめとして、早稲田大学浜邦彦研究室に映像アーカイブを置き、試験的な運用を試みているが、本格的な運用のためには、管理維持の方法、肖像権や著作権の問題など、解決しなければならない課題も多い。

### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計4件）

- ① Mouri, Yoshitaka, "FROM SHAKING ISLANDS, A NATION DIVIDED," Cultural Anthropology (web) Journal of the Society for Cultural Anthropology, 査

読無, 2011, 電子媒体.

- ② 五野井郁夫, 「シティズンシップとグローバルな倫理: 当事者概念による歓待の政治をめぐる」, 『平和研究』, 査読有, 36号, 2011年, 99-115頁.
- ③ Yoshitaka Mori, "New Art and Culture in the Age of Freeter in Japan - On Young Part Time Workers and the Ideology of Creativity," Kontur, Aarhus University, Denmark, 査読有, Vol.20, 2010, pp.48-53.
- ④ 五野井郁夫, 「シティズンシップとグローバルな倫理: 当事者性による歓待の政治から」, 『平和研究』, 査読有, 36号, 2010年, 99-115頁.

〔学会発表〕（計11件）

- ① 毛利嘉孝, 「ストリートからの脱原発運動」, 日本現象学・社会科学学会シンポジウム「核と社会: 原発リスクと社会的選択」, 2011年10月13日, 高千穂大学.
- ② Ikuo GONOI, "Creating super common against privatization: The case of the Miyashita Park in Shibuya," Tokyo Third Global Conference on Economic Geography 2011, 29 June 2011, COEX, Seoul, Korea.
- ③ Ikuo GONOI, "The World's End: The Cognitive Turn from "Sekai" to "Shakai""", Conference on Emergent Politics, Cultural Typhoon 12 June 2011, Temple University, Japan.
- ④ 五野井郁夫, 「政治哲学の現在」, 社会思想史学会, 2010年10月23日, 神奈川大学.
- ⑤ 五野井郁夫, 「テーマパーク化される都市の公共性」, 上智大学グローバル・コンサーン研究所公開シンポジウム, 2010年10月12日, 上智大学.
- ⑥ 五野井郁夫, 「セカイからシャカイへ: 再魔術化された〈日常〉と新たな社会的紐帯の発見」, カルチュラル・タイフーン, 2010年7月4日, 駒澤大学.
- ⑦ GONOI, Ikuo, "Third Wave of New Social Movement and Transnormative Culture," The Anthropology of Japan in Japan (AJJ) annual conference 11 June 2010, Temple University.
- ⑧ 五野井郁夫, 「ラディカル・デモクラシーと政治空間の創出」, 日本政治学会, 2009年10月12日, 日本大学.
- ⑨ 毛利嘉孝, 「グローバリゼーションの時代のD i Y的政治=文化運動」, 日本平和学会, 2009年6月13日, 恵泉女学園大学.
- ⑩ 浜邦彦, 「平和運動論再考(討論)」, 日本平和学会, 2009年6月13日, 恵泉女学園大学.

- ⑪ Yoshitaka Mouri, "New Art and Culture in the age of Freeter in Japan: on young part time workers and the ideology of creativity," Visualizing Asian Modernity:Contemporary Art and Social Change, 16 May 2009, Arhus University, Arhus Denmark.

[図書] (計 2 件)

- ① TwitNoNukes (編), 松沢吾一, 毛利嘉孝, 立花栄ほか, 河出書房新書, 『デモいこ: 声をあげれば世界が変わる 街を歩けば社会が見える』, 2011 年, 全 63 頁.
- ② 毛利嘉孝, NHK 出版, 『ストリートの思想—転換期としての 1990 年代』2009 年, 全 270 頁.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

浜 邦彦 (HAMA KUNIHICO)

早稲田大学教育・総合科学学術院・准教授  
研究者番号: 60388634

### (2) 連携研究者

毛利嘉孝 (MOURI YOSHITAKA)

東京藝術大学音楽学部・准教授

研究者番号: 70304821

五野井郁夫 (GONOI IKUO)

高千穂大学経営学部・准教授

研究者番号: 50586310

様式 C - 1 9

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書